

## 医師という仕事 と 母 として続けること

高柳友子

### 医師である母

私は医師である母から産まれた医師である。父と母は医学部の同級生だった。

昭和6年生まれ之母が医学部に入った時には、100名の中で女性は母を入れて3名だけだったそうだ。母は82を向かえた今も、現役で眼科を開業している。

元気印之母でもさすがにしんどいと思うことはあるし、気力が落ちることもあるようだが、白衣を着て患者さんの前に出ると、身も心もしゃっきりするという。

そんな母の実家は静岡で江戸時代から続く医師の家系である。とはいえ、8人兄弟の中の4人の姉妹に、医師は母だけである。当時は、叔父達から「女が医者なんかにならなくてよい」と学業を邪魔されたこともあるそうだ。そんな兄弟も8人中、現在生存しているのは半分になってしまった。

私が医学部にいた時には100人中女性は3割弱だった。最近では半分は女性だと聞く。ところが、30代前半くらいで現役から退き、臨床を続けない女性医師が多いと聞く。女性医師として、その現状には悔しさと憤りを感じている。

なぜ母が医師になろうと思ったか、そしてなぜ私が医師になろうと思ったか と考えてみた。そして、医師 という仕事はどんな仕事なのか今一度考えてみたい。

### 医師としてのライフワーク

私の母には二つのライフワークがある。眼科医になったのは、大学でとても母を可愛がって下さった教授が眼科で、「眼科という科は、女性が続けやすい科だと思う」と薦めて下さったからだそうだ。おそらく、重症がない、救急が少ない、がゆえに当直が少なく、夜勤も少なくて済む。外科や脳外科、救急や産科、小児科と違って という意味であろう。それには、救急病院で研修した私としては一言いいたいが、当時の母にとってはよい出会いだっただろう。眼科医局に入局し、同級生であった父と結婚して、当時としては画期的だった「僕に迷惑かけなければ仕事をしてよい」の言葉から(今の時代なら、相当な犒贍を買う言葉であるが)実家のサポートも得ながら仕事をしていたと聞く。今のようにイクメンなどという概念はまったく皆無であるから、保育園の送迎も、熱を出した時に仕事を休むのも母のみ。子供の体調から少しでも遅れて病院に到着すれば、同じ女性のはずのナースに「だから女医さんは嫌なのよ」と言われ、必死に急いで仕事を終えて、それでも遅れて保育園に迎えに行けば今度はこれまた女性である保育園の先生に「だから女医さんは困る」と怒られる。「保育園に預けてまで

仕事をする」ことを罪悪かのように言われることが、何よりも辛い時代だった。

そんな経験もあり、父が留学を決めた2年間は、母は完全に仕事を辞めて父について渡米した。私は3歳だった。2年間は、仕事を続けることに多くのエネルギーと意欲を費やさなかった。全く英語が出来ずにいきなりの渡米だったので、各々の年齢で各々の苦勞があり、それを見守ることと自らの環境適応でいっぱいだったのではないかと想像する。

若い時代だし、新しい環境、外国での生活をお金がない中でも唯一無二の経験として楽しんで来たとは思いますが、ただでさえ学生のような身分での留学、まして1ドル350円の時代、仕事ができない母のフラストレーションたるや並大抵ではなかっただろう。

ただし、周囲から見れば、特に日本人的価値観からいえば、夫の仕事を支えるためにアメリカでは専業主婦に徹した良妻賢母 だったはずだ。

その間、父も母も40代。最も仕事を覚えて重要な役割を担えるようになる、伸びる時期である。自分の同級生達は皆、どんどん上に上って行く、そんな時に自分は家で掃除洗濯、育児に料理 と 地味で評価を得られず、繰り返して結果が出ない役割を与えられる。世の大半の女性が、嬉々としてその役割を楽しめるのは、数ヶ月が限界であろう。精神的におかしくならなかつただけましである。私はその幼少期の記憶はあまりない。

2年が経ち、日本に帰って来た頃には驚く程 日本語が話せなくなっていた。純粋な日本人である父と母が如何に英語を習得することに徹していたかが伺えて今更ながらすごいことだと思う。が、私はまったく日本語が話せなくなっていたことから、保育園でとても苦勞をし、いじめに遭った。

帰国してからは父は大学病院の助手に、母は父の実家から提供してもらった土地で眼科を開業した。

大学や総合病院の眼科医として勤務していた時代に、ライフワークとして取り組みたいと思ったテーマが一つあった。眼科医としての終末は失明である。眼科医として失明宣告をする時に、その後の生活についての情報提供やサポートが一切ないことに気づいた。それでは失明を宣告されて、線路に向かえ というのも同じではないか。そう考えたが、先輩にも同僚にも答えを持っている医師はいなかった。自分で調べて、当時大阪に唯一見つかったライトハウス に行き「失明した後を支える何かが必要では？」と聞いたところ「行政に頼っても仕方ない。自分でお金を貯めてそんな施設を作って頑張れ」といわれたそう。以来母の中には、その強い想いが残り続けた。

## もう一つのライフワーク、色覚異常の差別撤廃

また地域の眼科医として、学校医を引き受けた。私が小学 3 年生頃だったが、ある勇気ある父親が、「息子が教科書の絵が見にくいと言っている。見やすい配色にして欲しい」と訴えて来たそうだ。色覚異常 と判定を受けた男の子だった。そこから、母はまず、全国のありとあらゆる教科書と教材を取り寄せた。我が家のダイニングもリビングも教科書と地図帳等で足の踏み場がなくなった。「教科書の色刷り改正」の仕事をした。当時石原式色盲表で誤読があると、通知表の「色神」という項目に「色盲」と判定され、それが進学先、進路、果ては伴性劣性遺伝であることから、結婚にまで影響することが、この仕事を皮切りに分かって来た。一方で彼らが日常生活で何か支障があるかといえば、何も支障がない。色が分からず白黒に見える訳でもなければ、赤も緑も判別出来る。信号の色も区別出来れば、視力障害が伴うわけでもない。調べれば調べる程、「色覚異常者は、成績の如何に関わらず不合格とする」と書いている日本のほとんどの医学部の制限に、疑問を感じた。一方で、その判定をされた子供達の母親は、「自分の遺伝子のせいで」と、責任を感じ、暗く前向きになれない毎日を送り、家庭不和の原因になっていたことも少なくなかった。「色覚異常者の差別撤廃」「事後措置のない、制限のためだけの検査は廃止すべし」との活動を始めたのは、私が小学校の高学年だったか中学に上がった頃だったか。

以来、教科書の次は、全国の医学部の募集要綱、その次はボート免許、パイロットに警察官 と ありとあらゆる書類を、自分の眼科の従業員に手伝ってもらって取り寄せては分析し、その結果を学会で発表し、行政に訴え続け、ついに、私が大学の中に、学校保健法から色覚検査を廃止させることとなった。その間、色盲は治る！と詐欺治療を行っていた業者からの脅しの電話や、大学病院や学会のエライ先生から「眼科医を存亡の危機に合わせたとんでもない眼科医」と目の敵にされ、落ち込む母の姿を見て来たが、娘としては一緒に闘って来た。この仕事は、間違いなく、医師である母の、母の視点としての仕事であったと、娘として誇りに思っている。そして、正しい仕事をしていても、敵はいること、世の中には私利私欲のためにエネルギーが使う大人が、どの世界にもいることを学んで来た。

一方で若き頃から目標としていた、中途視覚障害者のリハビリテーションの仕事は、NPO 法人を立ち上げて、リハビリテーションを勉強する人材養成のための教育を海外で受けさせるための資金援助と、ボランティアが活動出来る場を私財を投げ打って作った。また日常診療の中で、数は少ないが先天盲や弱視の子供が十分な教育が受けられるような環境づくりに、学校、教育委員会等を奔走した。学校が受け入れてくれ

ないと憤っていたかと思うと、「〇△大学に入学したんだって！」「パラリンピックに出るんだって！！」と嬉しい便りを貰うことも娘として共有した。

母として

一方で私の幼少期の母は、既に開業医から始まっているので、常に忙しい人だった。私は鍵っ子であったし、クラスの皆が、お母さんが来てくれる場面でも私だけ母親がいないことは常。父は常に夜中に帰って来て朝には出かけて行き、1週間に一度日曜日の朝寝ている姿をみかけるくらいの生活だったので、お手伝いさんが作ってくれる夕食を1人で温めて食べることも多かった。母に「クラスの子の中で夕飯1人で食べたことがあるの 私だけだって」と言って、母が寂しそうな顔をしたのを見て「なんてひどいこと言っちゃったんだろう...」といたく反省したことは今でも覚えている。

それでも、母は私の友達をよく知っていたし、お弁当は毎日欠かさず持たせてくれた。誕生日会は何時でも家でケーキを焼いてお友達をたくさん呼び、お友達を呼んでのお泊まり会もした思い出はたくさんある。喧嘩もたくさんしたし、傷つくこともわざとたくさん言ったりしたし、母からも随分と憎まれ口をいわれた。が、思えば、母の仕事のことをいちばんたくさん聞いていたのも、相談に乗っていたのも、そして中学くらいからは、母が書く原稿を読んで意見を言ったり、書き方を直して校正をしたりしていた記憶がある。母も私を頼りにしてくれていたから、母の話聞くのが面倒だと思ったことはないし、むしろ一緒になって闘い、母が本を出した頃には、大学生の私は、そこに原稿を寄せたくらいであった。

一方で、父の仕事は、というと、たまに父が家に招く友人から聞く話と、母を通じて聞く話くらいで、父の仕事について語れといわれても困るくらいの情報しか持ち合わせていない。

仕事を家庭に持ち込め！

私が母を尊敬し、母のいちばんの味方になれたのは、私がいちばん身近な母の理解者であったからだ。それも、母が常に仕事を家庭に持ち込んでいたからだ。

日本では よく、「父は決して仕事を家庭に持ち込まなかった」と美談を聞かされたが、私はこれには真っ向から反対したい。

仕事で機嫌が悪いことを理由も述べずに持ち込まれては堪ったものではないが、だからこそ、仕事を家庭に持ち込み、なぜ機嫌が悪いのか、を話して享受することが、家族間のコミュニケーションになる。まして、医師 という仕事は、精神的にも時間的

にもしっかり区切れる仕事ではない。そしてそんな区切りをしないことが理想的な医師の姿として患者さんには求められる。だから、むしろ家族全員に応援してもらうためにも、仕事を家庭にどんどん持ち込むべきだと私は確信している。そして、懸命に仕事をしている背中を見せることで、理解してもらうことが大切だと思う。

こんなライフワークをしている母は、私には、常に「女が仕事をして男性と一緒にのように認められるには5倍は働かない」と言っていた。耳にタコができる程聞かされたこの言葉は、自分が子育てをするようになって、ようやく意味を持った言葉になった。

今は母の時代とは違い、5倍とはいわないが、まだ倍では持たない気がする。3倍仕事をしてようやくか、というのが私の感覚だ。ただ、これについて私は一切悲観する気はない。むしろ、女性には3倍頑張るだけの能力が与えられているのだから、それを自負して頑張るべきである。

楠本イネさんの生涯を見ても、彼女が女性でなければ、とうに鬱になって自殺でもしているか、お酒か賭け事に溺れているのではないかと思う。

女性は子宮を持って産まれる。子供を産み授乳する能力を持ち合わせている。

男女共同参画が叫ばれ、イクメンだ、育児に対して父親も育休を取れるようにすべきだと議論があるが、男性が母親になれるわけもない。

子供は母親からしか産まれないし、母親が安定し、子供を愛し、守ることが出来れば、必ずや巣立つだけの力をつけていくものだと思う。

その母親には女性として、母として無限の能力が秘められるのだ。自己実現としての仕事と母親であることの両立は、そもそも出来る能力を兼ね備えて産まれているのが女性たることだと思う。懸命に努力すればするほど能力は進化していく。ところが、家にいて出来るだけ多くの時間を一緒に費やすのがよい母親たることなどと錯覚を起こして家に引きこもることで、不安定になり、自己実現出来ない不満から子供にも悪影響を与えることになる。それが今、職業的に高い能力を持ち合わせているにも関わらず、家に専業主婦として入ってしまった多くの女性に与えられている環境なのではないかと危惧する。

周囲からはよく、「あなたのお母さんはスゴイ」「あなただから出来る」と言われるが、母も私も自分を特別だと思ったことは一度もない。むしろ、頭もあまり良くないし、飛び抜けた特殊な技能を持っているわけでもないのだから、ただただ目の前にあることに必死になって懸命に頑張るしかないということを知っていただけだ。そして、懸命に頑張っていない自分は好きになれないこと、誰にも必要とされない自分を感じるものが何よりも恐ろしいことを知っているだけだ。

## 続けること

もう一つ、母から、耳にタコができる程いわれたことは、「絶対に辞めるな」ということだった。

いちばん迷惑をかけにくい時期に子供を産もうと考えていた私は大学院の間に子供を産んだ。それでも週に2回外来をしに行っていたので、頻繁に「なんでその日に限って熱出すの〜」と落ち込んだ。こんなにあてにならないならば申し訳ないから他のドクターに変わってもらった方が、と何度も思った。が、その度に、遠くに住んでいたのにも関わらず、状況を察した母から「お互い様なのだから、絶対に辞めるな。必ず、いつかご恩返ししますから、今はごめんなさい、と思っておきなさい。子供が大きくなったらご恩返しが必ず出来るから。今はちょっと凶々しくなっておきなさい」といわれて、ぐっと我慢したものだ。そして、今は自分の職場で、同じことを女性職員に言っているし、これから娘達にも同じことを言い続けなければと思っている。

ただ、だからこそ、凶々しくなったまま辞めてしまう女性が多いことが何よりも悔しいのである。

## 私自身の進路

進路を悩み始めた頃、母の仕事をいちばん理解している私が、ライフワークを継がなくてはいけないのではないかと、言ったことがあった。その時に母は、「あんたにもやりたいことがあるのだから、ママのためになんて、おこがましいこと言われたらたまったもんじゃないね！」と言い放った。

確かに私には私のやりたいことがあった。いじめられっ子だった頃、唯一心の友だったのが犬だった私は、中学高校の頃まで、犬や猫が捨てられていると、必ず拾って来てはこっそり世話をしたり、獣医さんに連れて行ったり、獣医さんが諦めたような病状の時には、父や母が治療をしてくれた。救えることがない小さな命を看取る度に、捨て犬捨て猫をなくすために何をしなくてはいけないのか、と憤った。そしてそれを自分のライフワークにしたいと思った。母からは、医者になれとは一言も言われなかったが、「あなたがしたいことは、大切な仕事だけど、それでは食えない。食える仕事を身につけなければ、あなた自身が力をつけなければ、あなたの言うことがどんなに大切でも誰もあんたの言うことなんて耳を傾けてくれやしない」と言われた。子供の頃から、たくさん大人の困まれ、大切にしてもらった私はいつも、何でも複数の人に相談をし、意見を聞き、そして最後に自分の結論を出す考え方をしてきた。進路を決める時にも、

母の意見、信頼する獣医師の意見、親戚、先生、友人、あらゆる人に意見を求めた。父が言ったことで覚えているのが、戦争時代の友人のお母さんが一家の大黒柱を失い、自分が仕事がないが故に苦勞している姿を見て、僕は仕事を持った女性と結婚しようと思った という話だった。だから、自分が達成したい目標のために、何かの資格を取り、食える仕事を身につけなければという想いは強かった。

信頼する獣医師に、「動物達を救うためにも、医学を学んで来て、僕に教えて欲しい」と言われた。そして、進んだ医学部の4年生の時に、アメリカに短期留学して介助犬や動物介在療法という分野と出会った。自分がライフワークと考えている犬や猫が、人の治療現場に活かされ、または人の人生を支えるパートナーとなっていく事業がある。ましてアメリカにはそのようなことを論文に書いている人がいる。衝撃だった。医師としてこの分野に関わりたい、それは必ずや犬や猫の地位向上につながる。そうすれば、犬や猫を安易に捨てる人は減るはず と考えた。

社会の流れやタイミングもあって、介助犬法制化に関わることになった。かくして、私の当面のライフワークは介助犬の普及活動である。

分野は違えど、母と同じく、誰も前を歩いていない分野をライフワークにしようとする私にとって、母はいつも、人がすることを全部しろ、妥協はするな、と叱咤激励してくれた。まともな医者になって臨床が出来て初めて「医師」を語れる。医師として新しい分野について語りたければ学位を取れ、と、犬は「汚い」と言われられないために「汚くない」といえる医者になるために寄生虫学で博士号も取った。

母は、私の仕事を応援し、自分のあらゆるネットワークに、自分の講演会を含めて介助犬の話題を振り込んで 一緒になって普及活動をしてきている。

### 仕事も家事、育児も全力投球

家庭が、特に子供が母親に求めるものは何なのだろう？ おいしいくて温かい食事がタイミングよく準備すること、片付いた部屋や、毎日のお洗濯、毎日のお帰りのさいということばなのだろうか。それ以上に、相互に理解し合っていること、支え合えること、そして何よりも、尊敬出来る人であることが大切なのではなかろうか。

### 医師という仕事と家庭

医師という仕事は、精神的にも体力的にも過酷な仕事である。時間の区切りも仕事とプライベートの区別も難しい。大きな責任と期待を背負い、自らの知識と技術を最大限に持って自信がなくとも自信を持った態度で患者さんに接して行くことが求めら

れる。人の人生をよくも出来、悪くすることも簡単に出来てしまう力が与えられている。大きな責任意識ばかりを持つが故に、自らの無力さに打ち拉がれ、感情を抑えてしまうことが当たり前になってしまう仕事である。

ただ、それらも含めて、自分自身で すべての管理が出来る仕事でもある。

今私には娘が2人いる。そして私は母以上に、時間的に忙しく家にいる時間が少ないと思う。全国に介助犬の普及活動に駆け回り、介助犬希望者で、きちんとした診断がついていない難病者、丁寧に診てもらったことがない、リハビリテーションの経験もない、支援も得たことがない、など、医療的にひどい経験をした方が日本中にまだまだたくさんあることも、この仕事を通じて知った。ふつうの病院の「先生」だけをしていたら知り得なかったことだったと思う。全国を飛び回って、障がい者の相談に乗り、リハビリテーションや支援体制に載せるなどのサポートをしながら、全国での支援やご寄付のお願いをしに行っているのだから、家にいるのは、寝ている間くらいである。

それでも、母がしてくれたように、毎朝お弁当を作り、誕生会は必ず家でケーキを焼き、お友達を家に呼び、遊びに食事にと娘達と共に過ごす限られた時間を謳歌している。子育ては18まで。飛び立って行くことを支えるのが子育てと考えているので、上の娘はあと3年、下の娘もあと5年で飛び立って行く と思うと、この期間が愛おしくて仕方がない。

娘達も、私の仕事のいちばんの理解者であり応援団である。それは、忙しい私に代わって娘達を見てくれていた、保育園、ベビーシッターさん、友人知人に、地域の子育てサポートの担当者等々、 本当にたくさんの よい大人達に囲まれたお陰である。この大人達から「介助犬の仕事は素晴らしいお仕事ね。お母さんの仕事はすごいよ。お母さんしか出来ない仕事なの。」と話を聞き、私ではないから出来る遊びや食べられるものがあり、寂しい反面よいと思えることを見つけられる力も身につけたからだろう。

日本には、シッター文化が根付かないことで、人に子供を頼むことがないが故に、忙しい日本社会での仕事に支障を来し、役割を失う女性、辞める女性が多いことは本当に残念である。

大家族やご近所付き合いが少なく、周りの多くの大人 がいない環境で育つ子供達には、投資してでも、親が選んだよい大人 とたくさん接する機会を作ってあげるべきだと思う。そのためにも、「仕事を家庭に持ち込め！」である。

そのことが、いちばんの医師としてのワークライフバランスになり、そして医師という仕事の一番の理解者を増やすことに繋がる と確信している。

医師という一生続けられる仕事を選んだ以上、辞めてはいけない。止まってもいけない。止まること、休むことで、返って自責の念に耐えられなくなる。

子供にとっても、中途半端な仕事をしている母親よりも、フル活動して、周囲から尊敬される仕事をしている母親の方が尊敬に値するに決まっている。

ただし、仕事をしていることに甘えてはならない。母親であることもフル活動すればよい。そして、何よりも、母であることが、唯一自分だけに与えられた、何よりも大切な役割から逃げないことだ。仕事は育児の逃げ場であり、育児は仕事の逃げ場になる。それを上手に使い分けて、でも、一番大切な瞬間を逃さないように、子供とは正面から向き合うこと。そのためにも、自分の仕事からも逃げない母親でいて欲しい。

大変なのはひと時で、女性は進化し、子供は大きくなり、時間が経てば楽になる一方である。

ひと時の辛抱 をしなくてはいけないその時期を乗り越えて欲しい。世の女性医師よ。絶対に辞めるな！一生、休まず、全力投球で続けるべし！！